

ねりまの文化財

一月二六日は文化財防火デー

文化財を火災から守ろう！

来る一月二六日(火)は、第四五回文化財防火デーです。この日を中心に、文化財を火災、震災などの災害から守るため、全国各地で文化財防火運動が展開されます。

昭和二十四年(一九四九)一月二六日に法隆寺金堂で失火があり、この世界最古の木造建築物に描かれた白鳳時代の仏教壁画が焼損しました。また、昭和二五年七月には金閣寺が火災に遭いました。これらの事件は国民に強い衝撃を与え、文化財を火災から守ろうと、法隆寺金堂壁画が焼損した日を文化財防火デーと定めるようになりました。

皆さんの記憶にあたらしいことと思

練馬区教育委員会
生涯学習課
(文化財係)
☎ 3993-1111 内線 7141
〒176-8501
練馬区豊玉北6-12-1

ますが、昨年五月二〇日に東大寺戒壇院

千手堂が全焼し、重要文化財の木造愛染明王坐像などが被害を受けました。文化財は火災で焼損してしまうと再び回復することは不可能です。文化財を火災から守り次代に伝えていくためには、関係機関や文化財所有者だけでなく、文化財

周辺の方々のご理解が必要です。文化財を火災から予防するよう平素から注意するなど皆さん方のご協力をお願いします。

練馬区内でも、練馬・光が丘・石神井の三消防署が次の寺社で文化財を守る防火演習を行う予定です。ご自由に見学できますので、是非おいで下さい。

練馬消防署

▼一月二三日(金) 午前二〇時三〇分

愛染院(春日町四一七一)

▼一月二六日(火) 午前二〇時三〇分

南蔵院(中村一一五一一)

光が丘消防署

▼一月二四日(日) 午前二〇時三〇分

氷川神社(北町八一三一一)

▼一月二五日(月) 午前二〇時三〇分

長命寺(高野台三一〇一三)

▼一月二六日(火) 午前二〇時三〇分

八幡神社(高松一一六一一)

石神井消防署

▼一月二六日(火) 午前二〇時

本立寺(関町北四一一六一三)

※問い合わせ先

練馬区教育委員会文化財係



南蔵院鐘楼門(区指定文化財)



昨年の防火演習(長命寺)

ふるさとねりまの再発見

石神井城フォーラム

文化財への理解と保護を目的に東京都では、今年度から、一月七〜一四日を「東京文化財ウィーク」と定め、文化財の一斉公開などの事業を行いました。これに合わせ練馬区では、一月一四日(土)に、日ごろ立ち入ることができない石神井城跡を特別に公開。周辺を会場として「石神井城フォーラム」を開催しました。

の自然や文化財を巡る探訪会、石神井城や自然をふるさとねりまの誇りとする区民宣言を行いました。

会場では、講演会、パネル展、石神井城跡発掘現場の公開を行ったほか、周辺

の自然や文化財を巡る探訪会、石神井城や自然をふるさとねりまの誇りとする区民宣言を行いました。

石神井城フォーラム参加記

「石神井城フォーラムに参加して」

フォーラム協力員 久保田 正

昭和二〇年〜三〇年代に石神井城跡のすぐ近くに住んでいました。三宝寺池の中に金の鞍が沈んでおり、高い木に登ると見えるというので登りましたが何も見えず落胆したことがあります。

城跡は凸凹もあり(土塁、濠)子ども

の遊び場所として絶好でした。石神井城フォーラムと城発掘調査隊の募集があり、すぐに申し込ませていただきました。学芸員の先生に種々教わりましたが、子どももの時分、知識があれば、まだ家も僅かの頃ですので、昔のことが解ったのにと残念です。今回、主郭の土塁の一部の発掘に参加しましたが、土塁の高さが一二メートルもあり塁の壁も堅く堅固な城砦であることが解りました。

発掘とはまさに探検のようで、掘る毎に何が出てくるのか興味津津でした。フォーラムのパネル説明の際、この辺に詳しい方々と話し合えたのは楽しいもの



でした。

練馬にこのような立派な文化財があるのは郷土の誇りです。子々孫々、大事に保存して行くことを念願しております。

「石神井城フォーラムに参加して」

文化財保護推進員 井口 敏

都内に残る貴重な中世の城跡について
・練馬区教育委員会行事の石神井城フォーラムが十一月十四日に行われた。空堀の一部を、公募に参加をした区民の方々が発掘調査をし、その現場が公開された。最深発掘部は六メートル位とか。

当日だけ公開した主郭跡に講演会会場があった。三名の講師の話は各々参考

石神井城フォーラムスケジュール

- 10:10~10:50 探訪会「歴史探訪コース」「自然観察コース」第1回
- 11:00~11:40 講演会「三宝寺池の植物を守る」
講師 鈴木孜(東京都建設局自然公園設計係長)
- 11:50~12:30 記念セレモニー(区民宣言) 司会 古今亭菊之丞
- 12:40~13:20 探訪会「歴史探訪コース」「自然観察コース」第2回
- 13:20~14:00 講演会「生物の多様性と三宝寺池」
講師 花井正光(文化庁主任文化財調査官)
- 14:10~14:50 講演会「石神井城と豊島氏」 講師 瓜生清(郷土史家)
- 14:55~15:30 探訪会「歴史探訪コース」「自然観察コース」第3回
- 10:00~15:30 パネル展示(歴史と自然の宝庫"石神井")
- 10:00~15:30 石神井城跡発掘現場公開

なった。

正午の時刻に合わせて道場寺の鐘の音が聞こえてくる頃、会場には区長、教育長、来賓、区民が参加して記念セレモニーが行われていた。また、樹林の中、郭の一つと考えられている場所には歴史と自然関係のパネル展示会場があり、資料の説明があった。

当日、私達文化財保護推進員は探訪会の歴史探訪コースを担当し、寺社巡り、池周辺巡りに分かれて、区民の皆様を案内して歩いた。氷川神社の石灯籠や水盤、三宝寺の御成門・梵鐘・石造物、道場寺は三重塔や静寂な本堂のたたずまい、更に旧名主栗原家の長屋門を見学し、午後四時頃終了した。

「発掘調査隊に参加して」

発掘調査隊(小六) 遠藤大樹

僕は、とてもいい体験をしたと思う。初めて発掘調査に参加したとき、道具の使い方が慣れなくてちょっと大変だった。しかし、調査をしていくにつれ、道具に慣れ、発掘のペースが早くなった。

初めて遺物が出たときは、とても嬉しかった。陶磁器や小石などの遺物が出る、いろいろな道具でその位置を調べた。遺物が出る度に、わくわくする気持ちでいっぱいだった。

発掘調査が終わって家に帰ると、「わ

あ、泥だらけ。」と言われた。でもその汚さが頑張った証拠。汚れたけど、とても楽しかった。

今後、もし機会があったら、是非また参加したい。

「石神井城の歴史を発掘しました」

発掘調査隊 水谷晴代

一日平均二〇人、延べ八日間の「人海戦術」でついに城跡の空堀の底を掘り当てました(深さ約六メートル、広さは畳半分くらいでしたが)。

土、日には子どもの参加もありましたが、主だった調査隊は平均すれば五十歳は優に越えていたように思います。その人力だけでよくここまで掘ったものだとフォーラムの会場となった土塁の上から堀の底を見下ろして感激ひとしおでした。

中世の遺構は出土品が少ないという話でしたが、縄文土器、常滑、染付の破片、寛永通宝などが出土、城跡一帯が長い歴史を封じ込めているのが分かりました。土層の時代を見分ける基準となる富士の火山灰が黒々と積もっているのも掘り出しました。

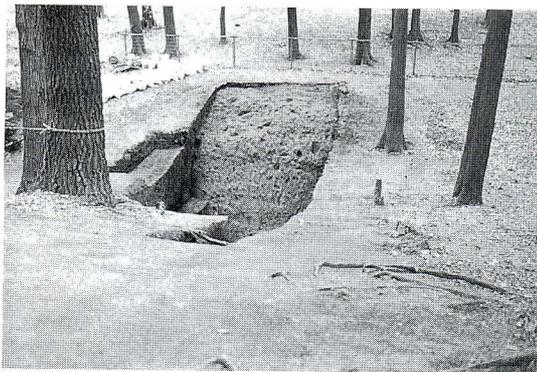
最初の目標であった空堀の底の形を見極めるところまで作業が進まなかったことが大変心残りでした。遠からず調査が再開されることを期待します。その時はまた是非参加させて下さい。

区民参加による

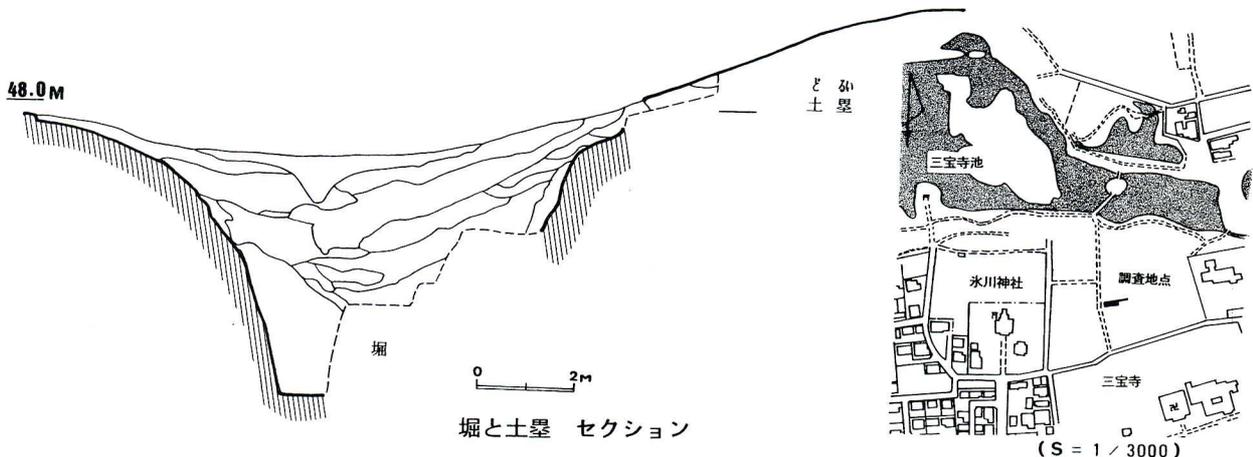
石神井城の発掘調査

都立石神井公園内に残されている石神井城跡の発掘調査を一月四日～十三日までの九日間、区民ボランティアの手で行った。石神井城跡は中世豊島氏の居城で、文明九年(一四七七)に太田道灌によって落城したと古文書にある。

今回の発掘調査は、主郭といわれている部分の堀を中心に実施した。調査は幅一メートルで長さが一四メートルのトレンチを設定し、堀の部分では四メートルに広げた。結果として、堀の上幅は一二・五メートル、現地表面からの深さは五・二メートルである。遺物は土塁から常滑の底部破片などが出土した。



調査区全景(土塁上から撮影)



堀と土塁 セクション

伝統工芸の普及のためにく伝統工芸教室く

今日も私たちの暮らしの中に生き続けている伝統工芸。その作品の一つひとつには、職人の英知や技術、心意気までもが感じられます。伝統的な技術と作り手の地道な努力によって支えられてきた伝統工芸は、世界に誇り得るわが国の文化の所産であるとともに、地域産業の一つとして経済の発展にも貢献してきました。戦後五〇余年が過ぎて、私たちの日常は大量生産された画一的な品物に溢れ、また、使い捨て中心の生活様式に慣らされてしまいました。そんな中であって、練馬区内にはまだまだしっかりと伝統工芸が活きているのです。



受講者作品展

昨年の一月一日から三日まで、練馬区伝統工芸会と練馬区、練馬区教育委員会の三者が主催する「第一〇回練馬区伝統工芸展」が、練馬区役所本庁舎を会場に開催されました。練馬に伝わる伝統工芸の技術と作品を紹介するとともにその技術を体験するコーナーも設けた展示会場には、多くの区民が訪れました。会場の一角に設置された「伝統工芸教室受講者作品展」は、生涯学習課文化財係が二年にわたって事業を主催した伝統



『江戸刺しゅうを学ぶ』受講風景

工芸教室「江戸刺しゅうを学ぶ」の受講者二四名の学習成果の発表の場です。会場内には、受講生たちの作品が所狭しと並びました。

この「伝統工芸教室」は、伝統工芸の区民への周知と保護思想の普及を目的としたもので、基礎的な技術を習得しながら伝統工芸への理解を深める生涯学習の場として、平成九年度から練馬区の伝統工芸技術者の方を講師として招き、実施しているものです。

全八回で構成するこの教室は、現在、『竹工芸を学ぶ』と題して竹細工の技術習得を目指し、二五名の受講生が学んでいます。ねりま区報の募集記事を見て応募した受講生たちは、真剣な眼差しで講師の話聞き、入念な手さばきで自分の作品を作り上げていきます。それはきつと大切な宝物になるのだと思います。



『竹工芸を学ぶ』受講風景

△受講生から見た伝統工芸教室V

「江戸刺しゅうを習ってみてすてき」

『江戸刺しゅうを学ぶ』受講生

山口和子

早くも受講して一年になりました。手芸は好きなので講習や展覧会に行きましたが、日本刺しゅうは習ってみたいと思いつつ、チャンスがなく今回参加できたのは幸せでした。

絹糸を使った江戸刺しゅうは、糸を撚ると、そのままの糸を使うのと二通りの使い方が特徴のようです。糸撚りが難しく手がカサカサしていると駄目なことが分かりました。糸の撚り方で作品の上手下手が決まりそうです。

教室では分かりやすく実演で教えて下さり、些細な質問にも答えて下さいますので、生徒は嬉しいですね。講師の先生のデザインと色彩はすばらしい。着物、帯、半衿、ふくさ、額等に江戸刺しゅうは生きてくるのです。基礎をしっかりと覚えて、やる気充分の教室のお仲間と大作ができる日を楽しみに続けたいと思います。作品は完成するとどなたもすばらしい。まだ経験のない方々も一度挑戦してみても如何でしょうか。

文化財保存技術

刀剣の保存と研磨

刀剣(以下日本刀とも称する)は、これまで幾多の危難の時期を経て、おおよそ三百万振余が我国内に存在すると推定されている。しかし、刀剣は素材が鉄である事により、手入れを怠ると錆を生じ朽ちてしまうという宿命を帯びている。

現在、奈良の正倉院には、千二百年以前の御物の刀剣が健全な状態で伝来しており、平安、鎌倉時代の作刀に至っては、沢山現存している。この事は各時代に於ける所蔵者が手入れを欠かさず大切に扱ってきた為であり、研師を始め、鞘師、鍔師等がその保存に関わり努力した結果でもあると言える。今日、刀剣の所蔵家には大別して二通りの方々がいると思う。

一、愛刀家として趣味で収集した場合
二、趣味はないが先祖、又は親から譲り受けた場合

前者は刀が好きで集めた訳であるから、よく手入れをしており、錆を生じさせる恐れはない。ところが後者の場合は厄介者扱いをする向きが多く、手入れが怠りがちになり易い。この様な方々には、刀は決してその人個人の物ではなく、後世に伝え残すべく一時の御預かりであり、大切な文化遺産である事を認識し、又は

研師等専門家に相談をし、正しい手入れの仕方を学んで頂きたい。

次に刀剣研磨について述べさせて頂く。研磨の歴史は、勿論、刀剣の製作と同時代であって平安時代(延喜年間)に書かれた「延喜式」には、当時の研磨の工程が既に記されており、それには、「磨砥一日、焼並中磨一日、精磨一日、瑩一日」とある。

「磨」は粗い、瑩は磨くと言う意味の字であるので、既に、荒研、中研、仕上げ研、磨きの四段階に仕事が進められている事が明らかである。本来、刀剣研磨の目的は当然、刀剣の鋭利さを増す事にあるが、次第に実用とともに、より美しく、神々しくなる様に、精巧優美な研磨が発達してきた。鎌倉時代の「増鏡」と言う書物によると、当時の後鳥羽天皇については、「刀剣の鑑定はその道の専門家にもたままざっていられた」と言う記述があり、既に鑑定の専門家がいた事がこれによって知られる。

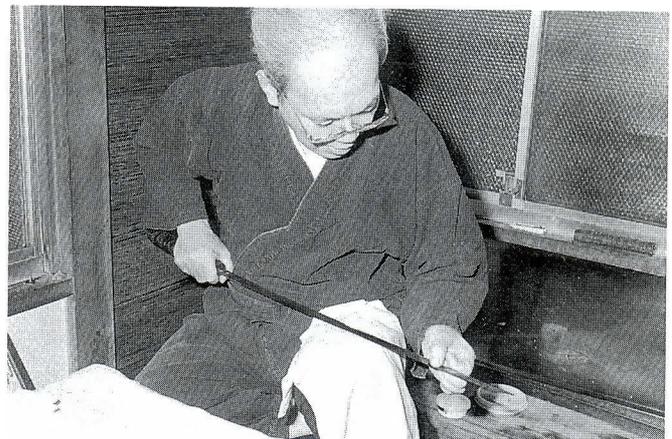
日本刀には実用に際して、折れず、曲がらず、よく切れると言う三原則があり、それに伴い、姿、肉置を実用にかなう、見事な曲線美にし、地鉄、刃文の美しさ

は他国に類を見ない独自の分野とし、

「世界に冠たる鉄の芸術品」にまで高めた事は周知の通りであるが、それに加え、「三種の神器」に代表される様に、神話の世界から今日迄、刀を単なる道具としてだけではなく、より高い精神性と美しさを内在してきており、この事は特に注目されるべきであろう。この様に日本刀には「実用」、「精神」、「美」の三要素が有り、それを適格に表現していくのが刀剣研磨の世界である。

更に作刀には時代、流派、刀匠個々の特色があり、刀匠が精魂を込めて鍛え、焼き入れた刀剣であっても、そのままの状態では通常みる様な刀剣の美しさはみられない。研師の伝統的な手作業による繊細な手法技術によって初めてその美しさや気高さを秘めた刀剣が完成するのである。

刀剣研磨は以上の様な要素を持つものであるが、その中で最も大切な事は、刀の健全な姿を永久的に保たせなければならぬ事である。その為には、なるべく研ぎ減らさないこと、必要以上肉を落とさぬ様注意すべきで、古作ほどその事は肝要である。



時代の特長を示す姿を研ぎ崩しては時代色がなくなり、刀工の特長を研ぎ荒らしては個性を失う事にもなる。しかも、一度研ぎ減らした刀は、再び肉を付けたら、崩された姿を本来に戻す事は不可能である。ここに刀剣研磨の大きな責任と技術の高まりが要求されるのである。

刀剣研磨師(文化財保護推進員)

工藤 昌利

練馬区指定文化財・小島家文書から

歴史のひとコマ

練馬の村々と和宮降嫁

ペリー来航(一八五三)以後、開国の当否をめぐる外交問題で朝廷と徳川幕府は対立しました。こうした朝幕間の緊張緩和のため、孝明天皇の妹和宮親子内親王は文久元年(一八六一)に中山道を下向して、後に一四代将軍となる徳川家茂に嫁ぐことになりました。

和宮は当初東海道を下向する予定でした。しかし、東海道は河川が多く通行に不便なことから道中に「異人遊行地」(横浜居留地)があることを理由に、中山道に変更されました。京を一〇月二〇日に出発して、十一月五日に江戸に到着しました。随行警固は一二藩、沿道警固は二九藩におよび、一行は前代未聞の大行列であったと伝えられています。

和宮の通行にあたり、中山道の宿とその周辺の村は、宿場での賄いや人馬の継ぎ立てなどさまざまな負担をしました。江戸に入る前日の十一月四日、和宮は板橋宿に到着し脇本陣の飯田宇兵衛家に宿泊しました。板橋宿では和宮の宿所など、和宮の一行のために建物の修復・新築が行われ、その費用として金一四二両と永一六六文九分が費やされました。

江戸時代には宿場に常置する人馬だけでは荷物の輸送ができない場合、周辺の

村で人馬を提供する助郷という制度がありました。和宮の下向にあたっては周辺の村から多くの人馬が徴発されました。写真は、区指定文化財の小島家文書に残る和宮下向に関わる文書で、土支田村下組(現在の旭丘、土支田付近)に宛てて幕府の代官である竹垣三右衛門の役所が出した通達とそれに対する土支田村下組の回答の写しです。

前半が代官からの通達の部分で、和宮の下向に先立ち、幕府の勘定方の役人が中山道の道路・橋梁・宿を検分するので道路・橋梁の普請の必要な場所を申し出ること、人馬の数を報告することを村へ申し付けています。

後半の部分は代官の通達に対する村からの回答で、助郷の対象となる下板橋宿(板橋宿)までの距離と助郷で賦課される人馬数の基準となる助郷勤高、助郷の対象となる馬・十五歳以上六十歳以下の男子の数が村から代官へ上申されています。

このように和宮下向に際して、練馬区内の村々は板橋宿の助郷村として人足を徴発されたようですが、具体的に負担がわかるのは小樽村(現在の大泉学園町・西大泉・南大泉付近)で、和宮が板橋宿に到着した日に七四人の人足と七匹の馬を提供しています。また、このとき上練馬村中宮組(現在の春日町付近)では、

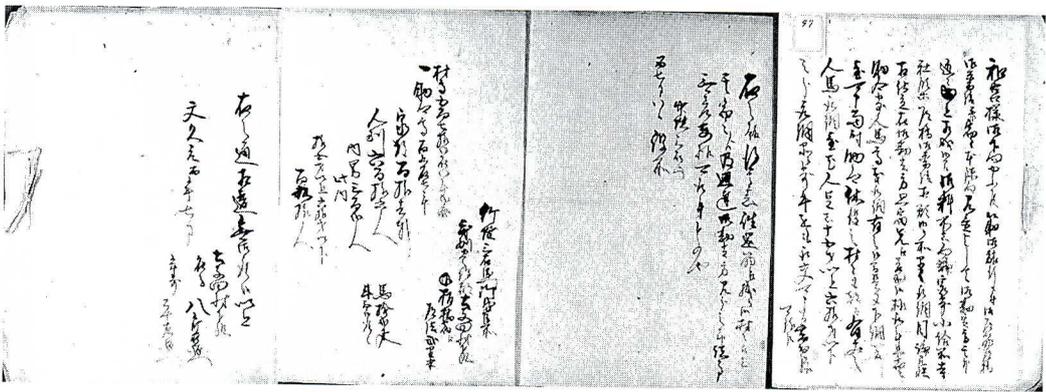
板橋宿に和宮一行の夜具などを提供したと伝えられています。これらの負担は当時の村々にとって決して楽なものではありませんでした。中山道木曾馬籠本陣(長野県)の島崎吉左衛門(島崎藤村の祖父)は、和宮の下向に際しかかる諸経費を考えると夜も眠れないと近親へ差し

和宮様御下向、中山道筋御旅行二付、御道筋道橋御普請并、宿々本陣向見置として、御勘定方其外近々出立相成候間、御料所者勿論最寄小給所持社領等道橋御普請相願候ヶ所、早々取調目論見帳相仕立、右御勘定方廻宿先江、差出候様取計、且宿々助郷寄人馬高義取調有之候間、是又下調いたし置可申、当時助郷休役之村々も都而有文之人馬取調置、尤人足者十五才以上六拾才以下之分取調品二寄牛をも取交可申間、書出候様可致候

右之趣得其意往還筋江、掛り候村々江者、其宿々より及通達、御勘定方見分之節諸事無差支様可取計もの也
竹垣三右衛門 役所
(文久元年)
西七月八日

竹垣三右衛門御代官所
武州豊嶋郡土支田村下組
下板橋宿江
道方式里半
村高五百七拾八石八斗式合
一 助郷高百九石七斗
家数百拾壹軒
人別六百拾六人
内男三百式人
内訳
馬拾式疋
牛無御座候
拾五才以上六拾以下
右之通相違無御座候 以上
土支田村下組
文久元酉年七月
名主 八郎右衛門
年寄 平左衛門

出した手紙に記しています。朝廷と幕府の緊張緩和、公武一体のための和宮の降嫁という国家的行事の陰には、中山道沿いの宿や周辺の村々のこうした苦労があったのでした。



昔の脱穀・精米体験会

米のはなし

昨年、一月二三日の勤労感謝の日に石神井台一丁目の氷川神社で、新嘗祭(にいなめさい)の後、午後2時から「昔の脱穀・精米体験会」が開催されました。地元のポー

イスカウト・ガールスカウト団の少年、少女のほか、地元農家の方など約一〇〇名が集まり唐箕(とうみ)などの昔ながらの農具を使って米の脱穀から精米までの農作業を体験しました。

奥野雅司さんが、栽培している方々に声をかけて、精米、脱穀の機会を提供するとともに、地元の子どもたちにも昔ながらの農作業を体験する機会として、企画実施したものです。

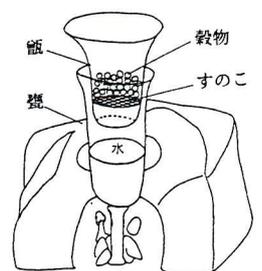
「昔の脱穀・精米体験会」に参加した子どもたちは、千歯こきで粳を落とし、竹箕(たけみ)や唐箕で粳を選び抜き、粳擦りをして玄米にするまでの作業を体験し、さらにくるり棒の使い方や農家の方から教わりました。普段見慣れている米粒になる過程に感動し、作業の大変さも感じたようです。

ところで、赤米、黒米とは文字どおり玄米では赤色、黒色をしている米で、普段私たちが食べている米とは違った種類の米です。特に赤米は古代から栽培されていたと考えられている種類の米で、かつては西日本を中心にかなりの収穫がありました。明治の中頃以降は駆除運動により神への供え物として神田(しんでん)で栽培される以外、沖縄の島々などの一部地域を除いて食用栽培されることが無くなりました。研究者によってはインドネシアのジャワ島やその東の島々を中心に分布する熱帯型ジャボニカ(あるいはジャバニカ)という種類の米であるとし、南西諸島を経由して北上し、九州に伝わったとも考えられています。陸

稲栽培(畑稲作)も可能で、宮崎県えびの市桑田遺跡では丘陵上の縄文時代末の遺跡の土から熱帯型ジャボニカ種の植物化石が発見されています。日本には中国大陸からや前述のとおり沖縄の島々を経由して伝わった米など、いくつかの経路で異なった種類の米が伝わったとされています。



さて、現在私たちは精米した白米を炊飯して食べていますが、いつごろから米を炊飯するようになったのでしょうか。実は本州に稲作が浸透した弥生時代には米は蒸して食べていたとされます。弥生時代から奈良時代の遺跡からは、甗(こしき)という形の土器が出土します。練



甗の構造と使用方法

馬区でも貫井二丁目遺跡の奈良時代の竈穴住居址から甗が出土しています。甗(かめ)と組み合わせられてカマドに据えつけて蒸し器として使われた土器です。古代には米を蒸して食べていたことがわかります。平安時代から中世になると甗に代わって鍋や羽釜(はがま)形の土器が出土します。この頃は米を煮て、粥として食べるのが一般的であったようです。さらに江戸時代になってから、現在のように炊飯して食べることが一般的になったと考えられています。

☆ ☆

江戸時代以降、練馬区は練馬大根に代表されるように、江戸・東京のまちに野菜類を供給する近郊農村地帯でした。武蔵野台地上では水稲耕作の適地が少なく、水田は石神井川などの河川流域にあったのみでした。ところが千川上水や田柄用水が通水し、引き水が可能になると水田を拡げる努力をしていくことが古文書などの記録から明らかになります。畑作物が主体でありながらも主食である米作りへの思いが強かったことが偲べれます。

堀北遺跡での新発見

堀北遺跡は富士見台四丁目、石神井川右岸の台地縁辺部にあり、縄文時代中期(四五〇〇年前)の遺跡で、竪穴住居跡などが多数みつまっている。

昨年9月、住宅建設に先立つ発掘調査で新たに古墳時代の竪穴住居跡が発見された。区内では数少ない古墳時代後期(鬼高式)の竪穴住居跡である。カマドの施設なども遺存状態が良好であった。写真は、この竪穴住居跡(上)とカマドに据えられていた土器の出土状態(下)である。カマドの支脚として土師器の高坏が転用されていた。カマド周辺には炭



古墳時代竪穴住居跡



竪穴住居跡のカマド

の塊や焼けた土が多量に出土した。

その他の遺構には、縄文時代の竪穴住居跡が二軒と縄文時代中期の屋外埋甕(家の外に土器を埋設したもので、臍の尾やエナ(胎盤)などを埋納したとも考えられている)、土坑やピットのような小穴が一〇個以上みつまっている。

出土遺物は中期や後期の縄文土器がもっとも多く、古墳時代の完全な形の坏や甕の破片、また、弥生土器の壺の破片など多量に出土している。

今回の調査で堀北遺跡は縄文時代だけでなく、弥生時代や古墳時代の遺跡でもあることがわかった。

郷土資料室特別展

「石神井川」展を開催します

石神井川は、武蔵野台地を刻みながら、練馬区を西から東へ流れる河川で、人々の暮らしに深く係わってきました。

この特別展では、ふだん何気なく見ているその流れが、何処から来て何処へ行くのか、どの様な流れかたをしているのかなどの素朴な疑問にお応えします。

また、古代から現在まで、人間の暮らしとどのように係わってきたか、どんな変ぼうをとげてきたかを展示します。

川の自然保護や、これからの石神井についても紹介します。

▼開催場所 練馬区郷土資料室 石神井

台一―二六―三一

(石神井図書館地階)

☎三九九六―〇五六三

▼開催期間 三月二日～五月三〇日

午前九時～午後五時

※月曜、第四金曜、五月四日・六日は休館日

文化財特別講座

刀剣を学ぶ

美術工芸品である刀剣の歴史や保存技術などを学び、刀剣の展示を見学します(三日制)。

▼日時・場所・講師

第一日目(講義)

日時 二月一五日(月)

午後二時～四時

場所 区役所本庁舎アトリウム地下

多目的会議室

講師 高山武士氏(刀剣文化研究所

主幹)「刀剣とは」

第二日目(講義)

日時 二月二五日(木)

午後二時～四時

場所 第一目目に同じ。

講師 工藤昌利氏(刀剣研磨師)

「日本刀の保存」

第三日目(バス見学)

日時 三月二日(火)

午前八時四十分～午後三時

場所 五島美術館(世田谷区)

▼申込み

往復ハガキ(一人一枚)に、①講座名②住所③氏名④電話番号を記入の上、二月一日から二月八日(必着)までに 区役所内文化財係へ。定員は四九名。応募多数の場合は抽選。

